

P31 日本行動分析学会第21回大会 発表論文集
2003年8月4日～5日 岡山大学文学部

通常学級における高機能自閉症児に対する挙手行動の指導プログラム

Acquisition of raising a hand appropriately in student with high-functioning autism.

○奥田 健次

Kenji OKUDA

吉備国際大学 社会福祉学部

School of Social Welfare, Kibi International University

I. 目的

本研究においては、通常学級に在籍する高機能自閉症児2名に対して、通常学級における一斉授業中の挙手行動を制御するための条件について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象児

S1は、生活年齢8歳4か月(VIQ84, PIQ80, FIQ80; WISC-III)の自閉性障害と診断された男児であった。S2は、生活年齢9歳11か月(VIQ79, PIQ111, FIQ93; WISC-III)の自閉性障害と診断された男児であった。両名とも、小学校通常学級に在籍していた。

両名共通にみられた特徴は、授業中の発言機会において担任が一斉に発する「何か質問がある人?」や「分かる人?」という弁別刺激に対して、必ず手を挙げてしまう行動があり、指名されてもほとんど適切なことが言えずに終わることであった。S1においては、クラス担任から母親にこのことについての指摘があり、友達から「分からないくせに手を挙げるな」などと叱責を受けることもあることが明らかとなった。両名の母親から「周りの状況や人の気持ちが分かるようになってほしい」といった要望があった。

2. 材料および条件

小学生用の国語辞典やことばの事典から、対象児に親しみのある単語(約7割)、あまり親しみのない単語(約3割)を質問トピックとし、個別に指導を行った。S1には1つ30円程度のお菓子、S2には電車のシールをトークンないし強化用の刺激として準備した。質問10試行を1ブロックとした。セッティングは、テストおよびベースラインと介入では対象児と友達役の母親が教師役の実験者の前に2人並んで座った。母親には、全でのブロックにおいて10試行中ランダムに3回は手を挙げないポイントを示したメモを事前に渡しておいた。

4. 手続き

(1)事前テスト: 通常、小学生には答えられないような質問(例えば、「現在の自民党の幹事長は誰か、分かる人?」)を5問、答えられる可能性のある質問(例えば、「蛙が上手に泳げるのはどうしてか、分かる人?」)を5問、実施した。

(2)ベースライン: ベースラインでは、まずブロックの始めに「質問や意見がある人は手を挙げて下さい。でも、友達が手を挙げることもあります。だから、手を挙げないように、がまんしましょう」と説明した。各試行では、辞典の中から適当な語について一通りの説明を行った後、「では、この〇〇という言葉について、何か質問や意見のある人?」と質問を促した。その後、10秒以内に誰も挙手しなければ次の試行に移ることとした。ブロックが終

わるごとに、指導者は挙手回数にかかわらず「よくがんばりました」といってトークンシートにトークンないし強化子の実物を置いた。

(3)介入1: ここでは、ブロックの始めにベースラインと同じ説明を行い、各試行の実施手続きもベースラインと同じであった。ブロックの終わりに「判定タイム」として、「さあ、〇〇くん(対象児の名前)は、がまんすることができたでしょうか。(トークンを対象児の頭上に掲げて、ドラムの音を鳴らす)」を実施した。介入1では、挙手回数が7回以下の場合のみ、ドラム音の後にファンファーレを鳴らしてトークンを手渡した。挙手回数が8回以上の場合は、ドラム音の後に「残念」と言ってトークンを手渡さなかった。対象児に、どうしたらもらえるのか聞かれてもブロック開始のときの説明以外は行わず、介入1の成功条件については伏せた。また、トークンがもらえずにかんしゃくを起こした場合、タイムアウト手続きを実施した。

(4)介入2: 介入1と同じ手続きであった。介入2では、成功条件を挙手回数が4回から7回(S2は4～8回)の間のみとし、それ以外を失敗とした。

(5)事後テスト: 事前テストと同じ手続きで実施した。

(6)小集団プローブ: S1とS2の両名、対象児の母親を加えた4人集団のセッティングで行った。ベースラインと同じ手続きとした。

III. 結果と考察

挙手行動の推移をFig. 1に示した。両名とも事前テスト、ベースラインともすべての質問に対して挙手を行った。介入後、両名とも数ブロックの失敗経験だけで、挙手行動数は成功条件に応じて収束した。これらの結果から、こうした社会性の問題について、他者の「気持ち」などの弁別や、機械的なルールの指導がなくても、分化強化手続きだけで適応していける可能性が示された。

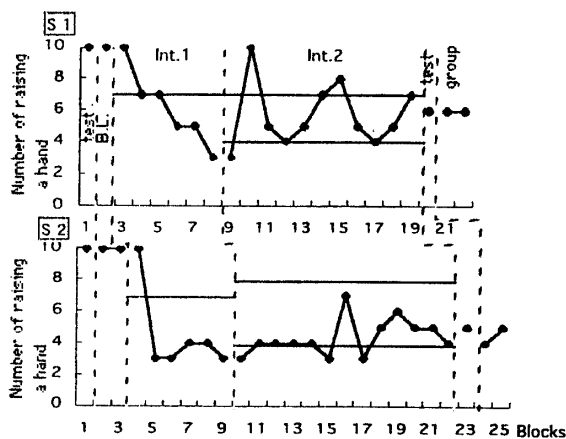


Fig. 1 各ブロックにおける挙手行動の推移